

## 「私が経験した4回の『1年生』」

鬼木 甫

2001年11月

私は、「経済学一年生」を過去に何度か経験した。現在の私は、「情報経済論」のテーマで講義を担当し、研究も続けている。しかし、経済学に初めて触れた当時の私は、そこから遠い場所にいた。それ以来私は、試行錯誤を繰り返して現在に到っている。プライバシーに近い事柄を語るのは私の趣味ではないが、「経済セミナー」の読者に参考あるいは反面教師になるかもしれないので、私の「経済学一年生」（複数）を書いてみたい。

私が東京大学に入学したのは、今から半世紀前の1952年であり、当時の日本にはまだ、成熟した経済学はおろか、安定した生活もなかった。社会科学の知識をほとんど持たずに入学して東大駒場寮に飛び込んだ私の周囲には、当時の経済困難と米ソ対立を反映して、マルクス経済学が溢れていた。私も人並みにマルクスの「賃労働と資本」「経済学批判」「資本論」（の一部）を読んだが、ドグマティックな叙述や、重複の多さに辟易していた。その中で、宇野弘蔵の「経済原論」が、整った理論構成という点で記憶に残っている。しかし私は、ドイツ観念論型の「概念構成」で示される学説には、結局馴染めなかった。

この時期に私が読んだ著作の中で影響を受けたのは、F. エンゲルスの「家族・私有財産・国家の起源」である。当時の日本の現実からかけ離れた家族形態・婚姻形態を示していた点で、まず驚いた。そして同書が、「人間社会の仕組みや制度（上部構造）は、経済関係つまり人々が日々に行う生活の営み（下部要因）から作られる。」ことを多数の実例で分かりやすく説いていることに感嘆した。もちろんこれは唯物史観の基本だが、私はエンゲルスの同書への共感とともに、唯物史観を自分の心の底に受け入れたと思う。私はこのことによって、それまで未分化状態で眺めていた政治やイデオロギー、道徳・宗教分野の事柄を客観的に見る立場を入手できたと思っている。<sup>1</sup>

私の第2の「経済学一年生」は、「近代経済学」（つまり現在の経済理論）との出会いである。それは、大学2年生の時に聴いた（故）内田忠夫先生の講義であった。たしか、D. デイラードの書物によるケインズ理論の解説であったが、そこで私は、「経済現象の因果関係を変数間の関数として抽象化・単純化し、そこで得られたモデルを使って、複雑な経済現象を、分析目的に沿うかぎり組織的に理解する。」という経験科学の社会現象への適用

手法に、初めて出会ったのである。その直後から、マルクス経済学は私にとって全く色あせてしまった。当時のマルクス経済学には、「貧しい人のために盡くす」という暗黙の道徳的評価がつきまとっていたので、近代経済学への「転向」は後ろめたさを伴った。しかしながら、経験科学の手法がもたらす納得感、そのようなモラルを吹き飛ばしてしまった。

当時の日本は、経験科学の手法に拠る「経済学」(近代経済学)の輸入・消化期にあった。私も、当時ハーバード大学留学から帰国されたばかりの古谷弘先生のゼミに入ることができ、線型計画論や産業連関モデルを学ぶことができた。当時の私は数学を好んでいたため、以後数年間は大学院で、数学を多用するこの分野の経済学をハッピーに受け入れた。(なお、古谷先生は、私が大学四年の時に30歳そこそこの若さで急逝された。周囲の皆から惜しまれた生涯であった。)

その後、私は米国スタンフォード大学に留学する機会を得て1961年に、K.J.Arrow教授のもとでDoctoral workを終えることができた。またこの期間、宇沢弘文先生の知遇を得る幸運にも恵まれた。同留学終了後は、芳賀半次郎先生の紹介で東北大学に勤務した。

私は1969年に、Arrow教授の紹介で米国ハーバード大学の教職に就いた。私にとっての3回目の「経済学一年生」は、そこでの3年間の経験である。それは、専門分野のリサーチについてではなく、経済学の教育・講義の仕方についての経験であった。当時ハーバード大学では、すでに学部教育と大学院教育が明確に区別されていた。学部では、経済学を必ずしも専門としない学生(実は入学学生の大部分)を対象とする経済学・経済知識の教育を行い、大学院では、専門家つまりエコノミストとして将来研究・教育・経済分析の職に就く人のためのトレーニングを行っていた。(日本の大学では、現在でもなお、専門家のための理論・学説をそのまま学部で講義するケースが多い。これは医者になるために必要な医学知識を一般の学生に教えることに均しい。)

ハーバード大学学部レベルの経済学入門の科目は、大講義と分割小講義(セクション)に分かれ、大講義は週1回だけ著名な教授が交代で担当し、セクションは若手の助教授や大学院上級生が、小規模クラスを週2-3回担当する。全体では、20-30のセクションができる。私もその1つを任された。そこでは、質疑応答を混えながら、経済学の初歩と経済知識を教えることが要求される。

私が最も苦勞したのは、経済理論と共に教えるべき経済知識であった。そこで必要となるのは、著名な歴史事項や、新聞記事などを例に挙げながら、経済理論を具体例で肉付けすることである。数式やグラフなどで表現された理論だけでなく、具体例による応用問題

を解説しながら、経済学の考え方を学生に習得させることである。ところが、日本から加わった私には、そのための材料となるべき米国の歴史や、日常のニュースについての知識が、他のセクション担当者と比べて格段に少なかった。したがって、私の講義は無味乾燥な理論一辺倒になってしまう。加えて、多数の日本人に共通する英語下手がある。当時同大では、すでに「学生による講義評価」が導入されていた。私は連日深夜に至るまで講義を準備したが、遂に最低のC評価から浮かび上がることができなかった。学生はもちろん私のセクションに不満で、他に移る動機が強い。私のセクションで比較的よくできた学生が、経済学科事務室の窓口に「セクション移動」を申し込んで断られ、「この大学は学生を助けず、teacherを保護している。」と苦情を言っているのにたまたま出会ったことがある。

今から振り返ってみると、同大における teaching ほど私に強い「競争圧力」を感じさせた経験はない。この結果、私は「実例で肉付けした講義ができるようにならなければならない。」ことと、「海外や国際的場面では、少なくとも聞き苦しくない程度の英語によるレクチャー・スピーチ能力を持たなければならない。」ことを強く感じた。前者のうち日本での講義については、経済事情に通じる努力をすることにより、ある程度までは解決した。後者については、当初解決の方策が見当たらなかったが、帰国後にある種のトレーニング方式を採用して解決できたと思っている。<sup>2</sup>

4度目の「経済学一年生」は、現在の専門である「情報経済論」の研究や講義に必要な技術知識・産業知識の入手についてである。まず私は、スタンフォード大学への留学時に、コンピュータ・プログラミングを習得することができた。実は同大学で、私をリサーチ・アシスタントとして使う資格を持つ助教授が、私に手計算によるデータ処理を要求したことがある。（当時電卓は無かったが、手計算用の電動計算機はあった。）私は手計算作業に大きな苦痛と屈辱を感じたので、当時使われ始めていた汎用コンピュータを利用したいと思い、何とか粘ってコンピュータ使用のアカウントをとり、助教授から命じられた仕事をコンピュータで処理して提出した。その助教授は当初怒ったが（同氏は自分がリサーチアシスタントであった時に、すべての作業を手計算で行ったとのことであった）、結局コンピュータの使用を認めた。

このような経験もあったので、私は経済学とコンピュータというテーマに長らく関心を持っていた。1970年代前半に、私はハーバード大学からカナダのクイーンズ大学に移ったが、当時ICやLSI開発のニュースが流れていた。私は、将来これが社会活動・経済活動の中枢部に浸透して大きな影響を与えるのではないかと漠然と考え始めていた。しかし

もちろん、それをすぐに経済学の研究に結びつける方法は思い浮かばなかった。これらの理由で、私は1973-74年に、クイーンズ大学から1年の休暇（negotiated leave）を貰い、奨学金をとってMITのコンピュータ・サイエンス学科に「留学」した。（米国では、この種の奨学金を寛大に出してくれる。）

私はそのとき、MITに1年滞在して、コンピュータ科学修士の学位を取ろうと計画していたが、これは失敗に終わった。当時すでに40歳代になっていた私は、優秀かつ柔軟な頭脳を持つMITの大学院学生に太刀打ちできなかつたのである。また、ハングリーな学生としてではなく、一応は教職に就き家族を抱えてのことであったので、力が入った勉強ができなかつたのかもしれない。MITでの1年は、気楽な留学という結果に終わった。しかしながら、同大でコンピュータ科学、情報に関する学習の手がかりを得ることができ、その後の私の研究・講義にこれが大変に役立った。

「情報経済論」は、まとまった研究分野としての市民権をまだ確立していないかもしれないが、その研究対象は、現在IT社会の進展とともに増加の一途を辿っている。この分野への多数の「新規参入」を期待して本稿を終わりたい。

---

<sup>1</sup> 写真の左方は、最近入手したF.エンゲルス「家族・私有財産・国家の起源」（新日本文庫）358+48pp.である。右方は、当時私が持っていた国民文庫社版（260+18pp.,1954）であり、各ページ周辺の用紙が炭化して崩れかけている。

<sup>2</sup> 紙面が無いので、詳細は別の機会があれば述べたい。